

=== T A C S 情報 第4号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和5年6月20日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、18.0℃（対平年差+0.5℃）と平年に比べ高かった。

6月上旬の平均気温は、21.2℃（同+0.9℃）と平年に比べ高かった。

6月3半旬の平均気温は、22.0℃（同+1.0℃）と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、260.0mm（対平年比 212%）と平年に比べかなり多かった。

6月上旬の降水量は、122.5mm（同 581%）と平年に比べかなり多かった。

6月3半旬の降水量は、18.5mm（同 84%）と平年並であった。

(3) 日射量

5月の平均日射量は、19.7MJ/m²/日（対平年比 107%）と平年に比べ多かった。

6月上旬の平均日射量は、19.7MJ/m²/日（同 101%）と平年並であった。

6月3半旬の平均日射量は、11.0MJ/m²/日（同 63%）と平年に比べかなり少なかった。

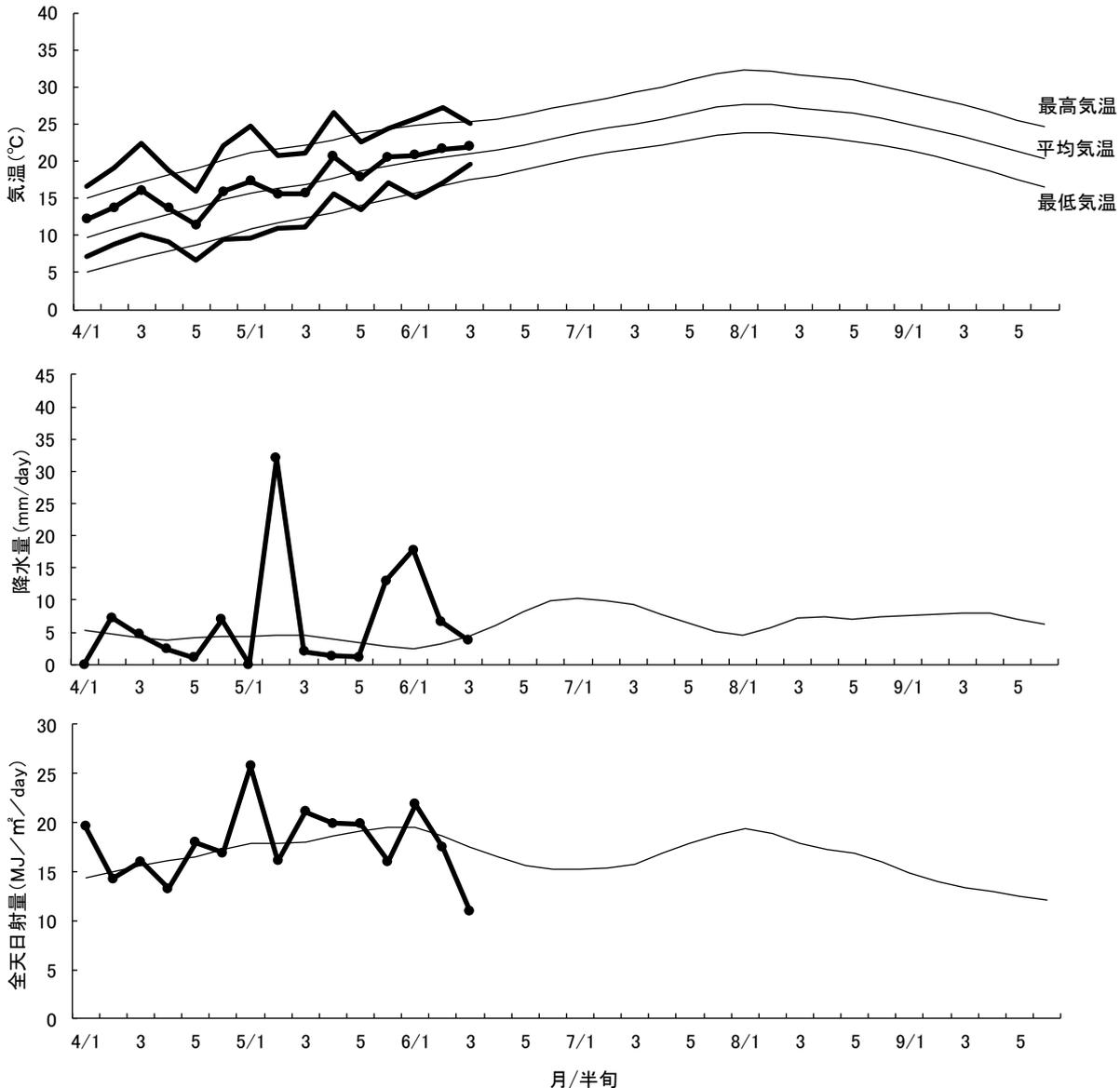


図1 令和5年の気象経過（富山地方气象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）てんたかく

平年に比べ、草丈、葉齢、葉色は並、茎数はやや少なくなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日遅い6月26日頃と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は7月17日頃と見込まれる。

表1 「てんたかく」の生育状況（6月20日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R5	5月3日	47.3	27.9	592	10.6	4.5	40.9	(6月26日)	(7月17日)
R4	5月1日	43.9	32.3	701	10.7	4.4	42.2	6月25日	7月14日
平年	5月4日	48.9	30.2	647	10.6	4.5	41.5	[6月25日]	[7月16日]
前年比・差	2	108	86	84	-0.1	0.1	-1.3	(+1)	(+3)
平年比・差	-1	97	92	92	0.0	0.0	-0.6	(+1)	(+1)

注1) 平年 : H25~R4の平均、ただし幼穂形成期の平年値〔〕は、R2~4年の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

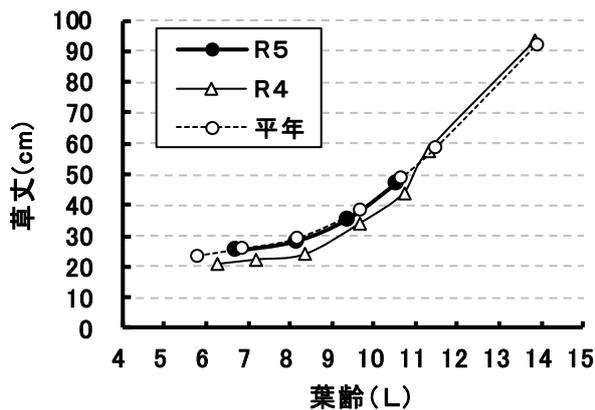


図2 草丈の推移（生観てんたかく）

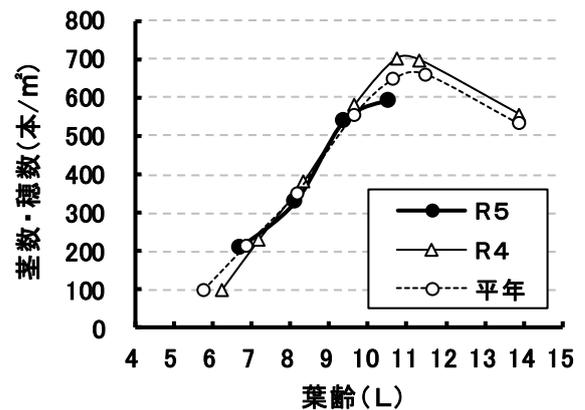


図3 茎数の推移（生観てんたかく）

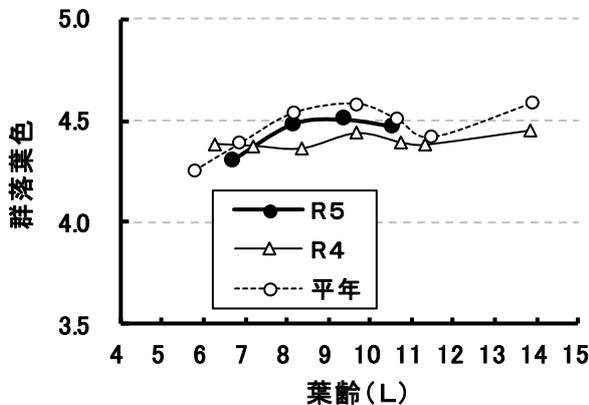


図4 葉色の推移（生観てんたかく）

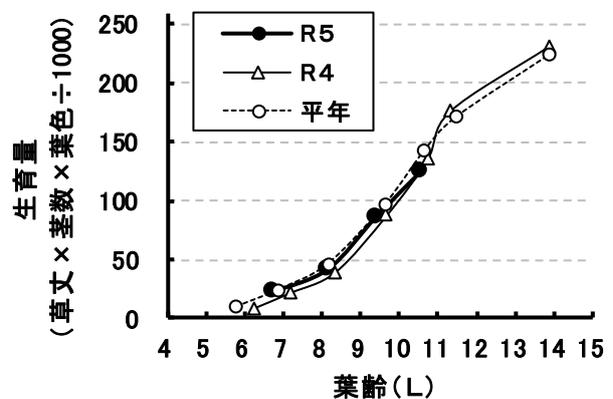


図5 生育量の推移（生観てんたかく）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢、葉色は並となっている。

今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年並の7月11日頃と見込まれる。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月20日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R5	5月13日	42.7	21.8	472	9.5	4.3	39.7	(7月11日)
R4	5月13日	37.7	24.5	539	9.4	4.3	41.5	7月8日
平年	5月14日	41.5	23.0	498	9.5	4.3	40.4	7月11日
前年比・差	0	113	89	87	0.1	0.0	-1.8	(+3)
平年比・差	-1	103	95	95	0.0	0.0	-0.7	(0)

注1) 平年 : H25~R4の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

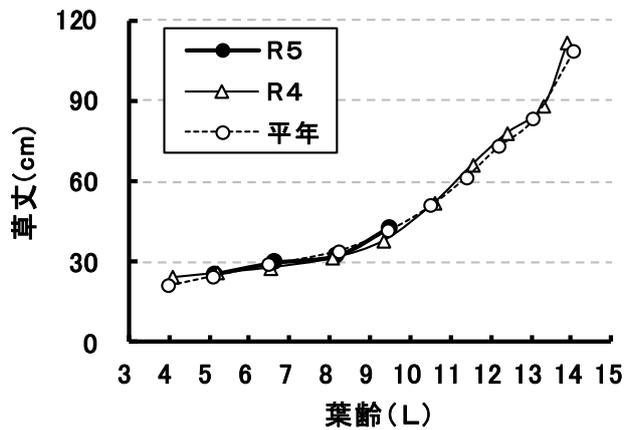


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

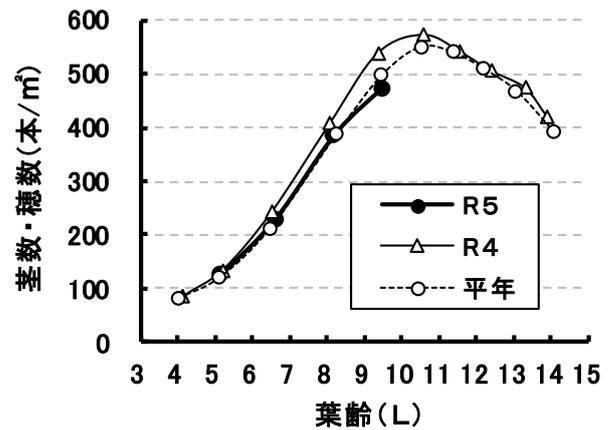


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

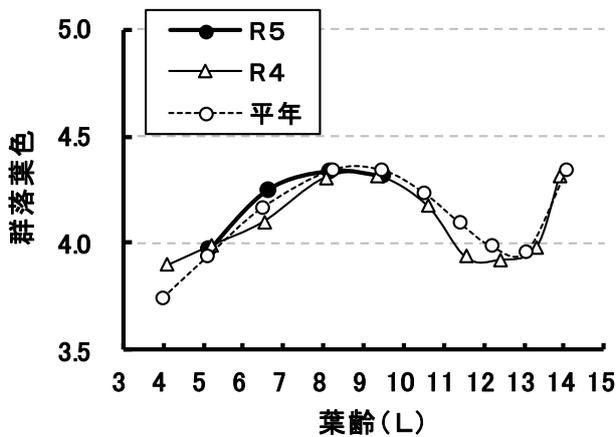


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

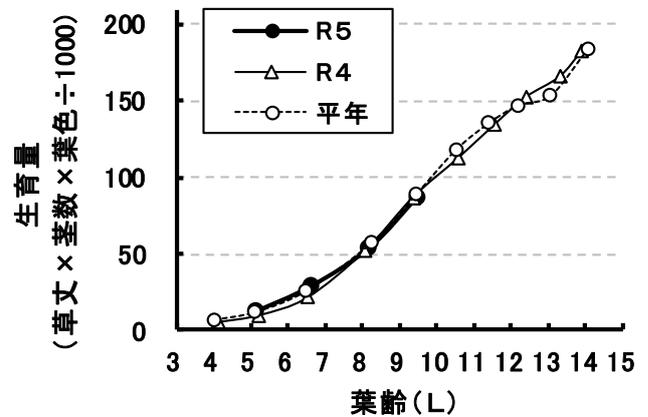


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈はやや短く、茎数はやや少なく、葉齢は0.4葉遅れ、葉色は並となっている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並となっている。

今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年に比べ2日程度遅い7月14日頃と見込まれる。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月20日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R5	5月10日	33.3	30.5	589	10.2	4.6	40.3	(7月14日)
R4	5月8日	31.3	32.2	617	10.3	4.4	41.5	7月11日
平年	5月8日	36.6	32.9	626	10.6	4.4	40.4	7月12日
前年比・差	2	106	95	96	-0.1	0.2	-1.2	(+3)
平年比・差	2	91	93	94	-0.4	0.2	-0.1	(+2)

注1) 平年 : H25~R4の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

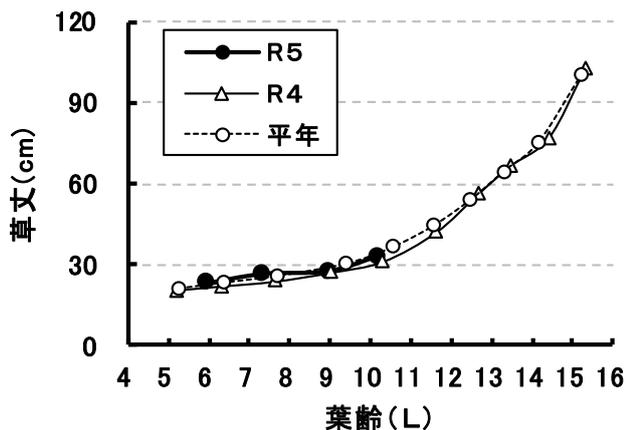


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

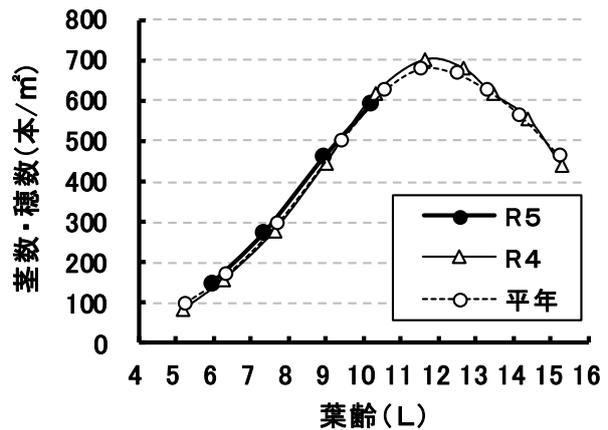


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

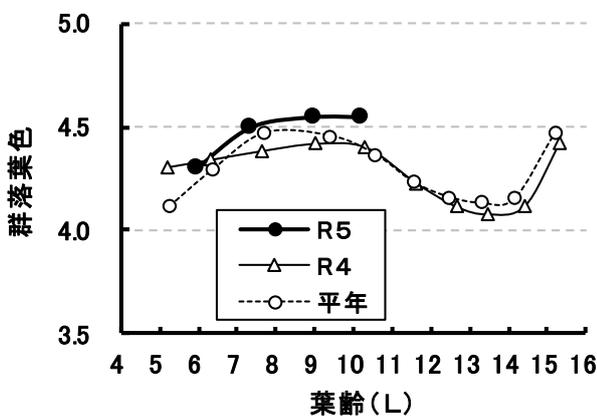


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

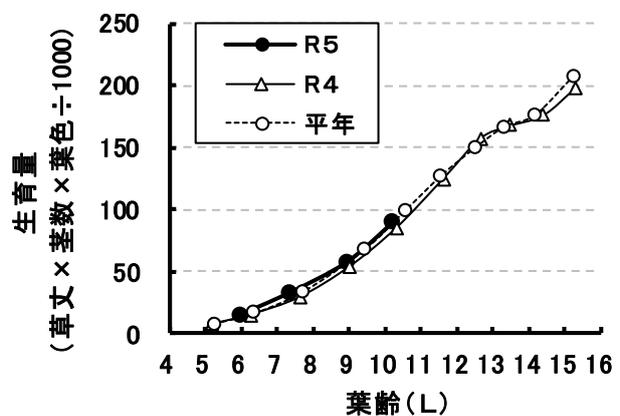


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・「コシヒカリ」、「てんこもり」は、中干し後の間断かん水で、幼穂形成期頃までに足跡の深さ3 cm程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期以降は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

(1) 「てんたかく」の管理

- ・ 幼穂形成期は、6月26日頃と見込まれる。
 - ・ 肥効調節型基肥栽培では、安易な追肥は過剰籾数や倒伏につながるため、原則施用しない。ただし、現在の葉色が4.0(砂壤土4.2)より淡い場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
 - ・ 分施体系では、穂肥は表4を目安に施用する。ただし、過剰籾数を防ぐため、壤土～埴壤土では幼穂形成期の葉色が4.3以上かつ茎数650本/m²以上の場合、沖積砂壤土では葉色が4.5以上かつ茎数700本/m²以上の場合には、1回目の穂肥は施用しない。
 - ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。
- ※ 出穂期の見込み：7月17日頃（今後、平年並の気温で推移した場合）

表4 「てんたかく」の土壌区分別穂肥窒素施用量の目安(kg/10a)

土壌区分	1回目	2回目
	施用時期	施用時期
	幼形期	幼形期の10日後
沖積 埴壤土	1.5	1.5
壤土	1.5	1.8
砂壤土	2.0	2.0
洪積 埴壤土～壤土	1.5	1.8

(2) 「コシヒカリ」の管理

- ・ 今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年並の7月11日頃と見込まれる。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように管理し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3 cm程度」に誘導する。ただし、葉色が濃いほ場では、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。
- ・ 安易な窒素の中間追肥は、過剰分げつや過剰籾数を招くので原則、施用しない。
- ・ これまでケイ酸質資材を散布していないほ場では、これらの資材を積極的に散布し、稈質を強くする。

(3) 「てんこもり」の管理

- ・ 今後、平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年より2日程度遅い7月14日頃と見込まれる。
- ・ 今後、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水は、乾かしすぎないように留意し、幼穂形成期頃までに土壌硬度を「足跡の深さ3 cm程度」に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡くなる場合は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(4) 病虫害防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類

- 今後、気温の上昇に伴い発生量が多くなると見込まれるので、イネ科雑草の穂が出ないよう草刈りを徹底する。

※草刈り運動期間：7月1日（土）～10日（月）
一斉草刈り日：7月1日（土）～2日（日）

- 本田内のノビエやホタルイも、斑点米カメムシ類による被害を助長するので、除草に努める。
- 麦あとほ場において、後作までに日数を要する等の場合は、雑草の穂が出ないよう草刈りや耕起等により管理する。

イ いもち病 ※平年の初発確認日は7月12日（R4：7月20日）

- 苗箱施薬を施用していない場合は、予防粒剤を6月20日頃までに散布する。
- 県内では、感染好適日が6月14、15日に出現している。BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）はこちらから →
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



ウ 紋枯病 ※平年の初発確認日6月23日（R4：6月22日）

- 現在、紋枯病の発生は確認されていないが、前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）、または、品種ごとの散布適期（粉剤、液剤等）に防除を確実に行う。
- 「てんこもり」ほ場では、箱施薬剤を施用した場合でも出穂7日前頃に発病株率を確認し、必要に応じて防除を行う。
- その他のほ場では、要防除水準を参考にし、適期に防除を行う。

表5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品 種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂 7日前頃	15%※

※「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

エ 白葉枯病

- 大雨により浸水や冠水した場合、白葉枯病が発生しやすくなるので、常発地等では、オリゼメート1キロ粒剤を出穂3～4週間前に散布する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、茎数、葉齢、葉色は並となっている。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、茎数、葉色は並となっている。

今後、近年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は近年より1日遅い7月14日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（6月20日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R5	5月16日	34.2	21.4	465	8.9	4.4	41.4	(7/14)
R4	5月16日	31.2	23.2	488	9.0	4.2	42.8	7/10
近年	5月15日	34.5	22.2	476	9.0	4.4	42.1	7/13
前年比・差	0	109	92	95	-0.1	0.2	-1.4	(-4)
近年比・差	1	99	97	98	-0.1	0.0	-0.7	(-1)

注1) R5：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、栽植密度・遅植え・プラ改善（内立山、小矢部）対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R4平均

注3) 本年の幼穂形成期は予測値

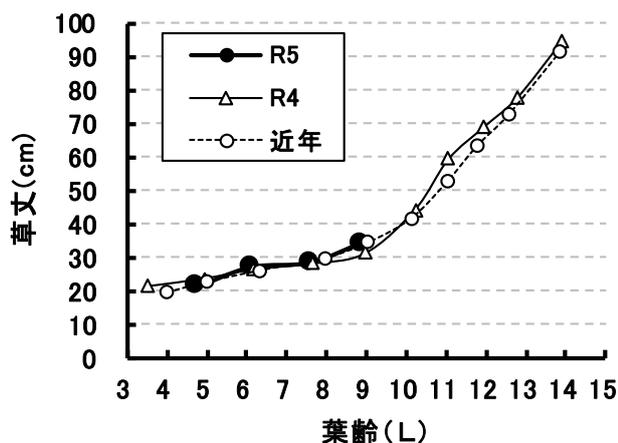


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

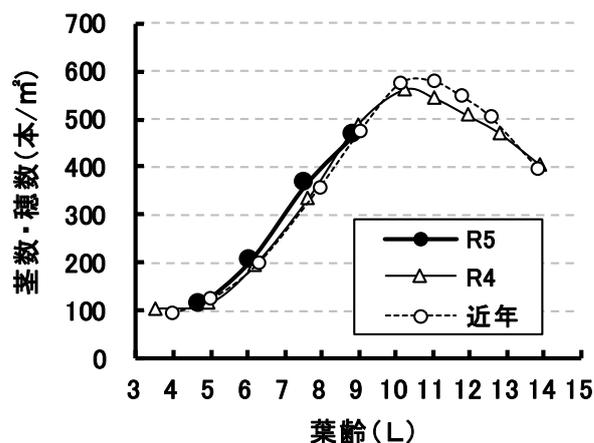


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

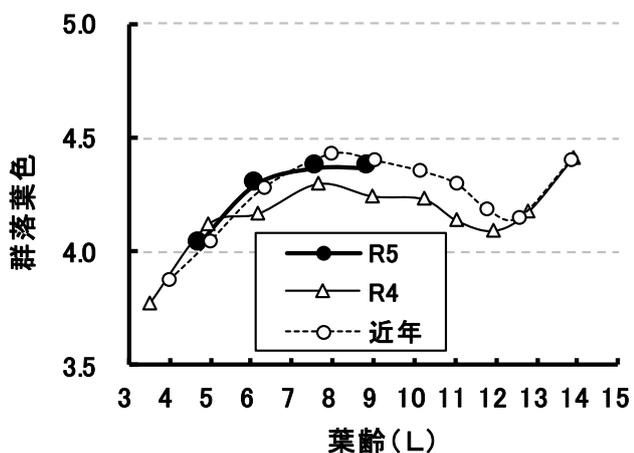


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

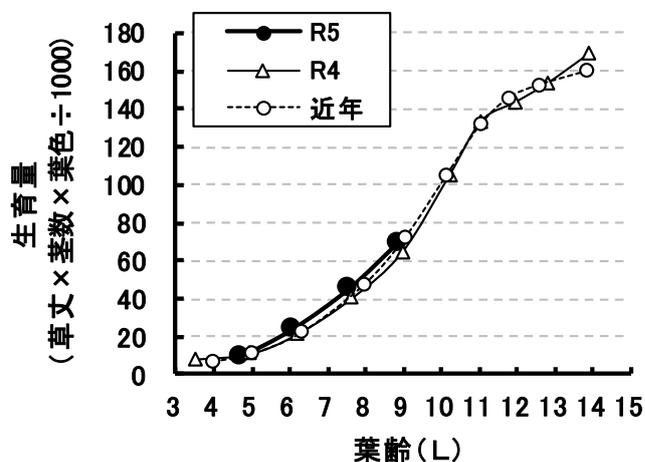


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

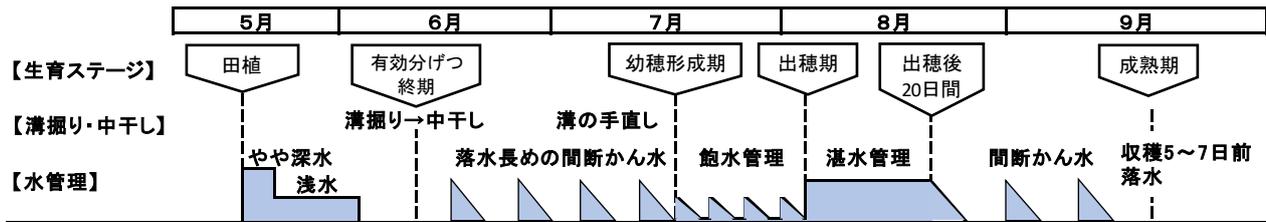
2 当面の技術対策

- ・「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

(1) 水管理

- ・ 籾数の適正化のため、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する。

<水管理のイメージ>



「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

(2) その他の管理

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。

なお、残草がある場合は、草種に対応した液剤等を用い、除草剤が雑草に確実に付着するよう丁寧に散布する。

次回の調査日は6月27日（火）です。

「てんたかく」の幼穂形成期の確認をお願いします。